

Title	日本経済思想史研究を回顧して
Sub Title	His contribution on study of history of Japanese economic thought
Author	島崎, 隆夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.10/11 (1960. 11) ,p.965(153)- 977(165)
JaLC DOI	10.14991/001.19601101-0153
Abstract	
Notes	野村兼太郎博士追悼
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19601101-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ているマニユファクチュア論争に關して「私は今それらの論争にあまり興味を感じない」とされている。従って教授は殆んど論争に直接に参加されるのは勿論のこと、関心さえも示されなかった。実際、教授の発表される論文は、他の何人もが容喙し得ぬ事実そのものの追求が殆んどであった。

教授は、こう言った歴史事実を、読者にそれを彷彿とせしめる平易な文章で描かれる。まことに教授の筆法は歴史を書くというよりは、「描く」と表現した方が正しいと思われる程であった。教授の屢々引用されたランゲの *wie es eigentlich gewesen ist* という問いがその研究態度に貫かれていた。教授にとって歴史はまづ何よりも *so* であった。勿論教授は恐らく *sein* の次には「どうしてそうなったか？」が取り上げられたであろう。しかし、そのためには神は教授に十分な時間を与えなかった。多数の個別的現象の「描写」、それらを取録されたいくつかの論文集・教科書的概説書を残されながら、恐らく教授にとっては日本経済史研究の総決算とも言うべき『日本社会経済史』はごく僅かの完成を見たに留まっただけであった。その意味では、教授の研究は未完成に終わったと言わなければならない。その真意は遂に、直接には我々の眼に触れ得ない事となったのである。そしてその構想の余りにも大ききのために、未完成に終わった空白を今後埋める事は、他人にとっては恐らく不可能かそれに近い程困難であろうと思われる。しかし、そう言った限定にも拘らず、教授の残された遺産は豊富である。まづ何よりも、旧経済史学

の打破、特に事実認識の方法に關しては、教授は日本経済史の研究に科学的方法を吹き込んだパイオニアの一人としてその名を永久に留められるであろう。また、自ら描き出された豊富な史実は、その事実が展開されてから現在に至る何百年という距離を縮められたと言える。また教授の個人的努力によって収集された史料集の公刊、さらには、ある点ではそう言った史料収集の個人的努力に限界を感じられ、その全国的規模での組織化への努力、これらは教授の歴史観の所産なのである。そして、最後に、我々の学びとるべきものは、最期まで持ち続けられた学問への情熱である。晩年の教授にはいくつもの公的な会合や任務が絶え間なく待ち構えていたが、そのさ中にあっても、寸暇を惜しんで研究室で一枚の文書を整理され、愛されていた時こそ、教授が最も自らの生き甲斐を感じて居られた瞬間であったと私には思われる。勿論その内容については、それこそ千差万別があつて然りであるが、学問研究に対する態度、学者としての生き方について、教授の示された範は、後学の我々にとっては一つの目標であり、理想なのである。

教授の学問的業績については、全体系を探り、他の部門との綜合を図る事が必要であり、そのためには周到な準備と綿密な検討が必要である。倉卒の内に書かれたこの文が、却って教授の学問的眞意を損うものである事を怖れるのであるが、教を受けた者の一人として追憶を記したまでである。

日本経済思想史研究を回顧して

島崎隆夫

野村兼太郎先生が、「日本経済思想史」研究の分野において果された業績を回顧し、わが国における「日本経済思想史」研究が今日まで歩んで来た研究史上において、先生が行なわれた研究の持つ歴史的意义を正しく把握し、将来の研究の礎石としたいと考えつつおたくしはこの小論を書いた。そのために、わたくしは、一、わが国における明治以降の「日本経済思想史」研究の発達史を概説することによって、先生が「日本経済思想史」研究を開始された時期における学界の特徴を明白にし、先生の研究が持った研究史上の位置を定めること、二、先生が生涯にわたる学的活動において「日本経済思想史」研究が如何に行なわれて来たかを、主要論文、著書の発表に即して概括を試みることに、さらに、三、先生が「日本経済思想史」研究において論じられた諸問題の中より、一、二の問題を選び、それに若干の検討を加えること、以上の三項目にわけて論じたいと思ふ。

日本経済思想史研究を回顧して

わが国経済思想、とくに徳川幕藩体制下に生成・発展した「経済」思想の発展過程の史的考察を目的とする「日本経済思想史」および幕末・維新时期以後紹介・移植された西欧先進国の科学としての「経済学」の史的展開を考察する「日本経済学史」は「未だ新しい研究の分野である」といえる。前者の研究を概括的にみるならば、個々の思想家や個々の学説に關しての研究には鋭い指摘と立派な成果があがっているにもかかわらず、わが国において生成・発展した「経済」思想を統一的に、系統的に、しかも發展的に把握する努力は、数少ない業績を除いては、未だ多く現われていないのが現状である。日本「経済」思想の史的考察が明治時代以降大正昭和を経て今日に至るまで、如何に発展して来たか、そこにみられる研究の特徴と、残されている諸問題が何であるか等についての「日本経済思想史」の研究史的回顧は最近本庄栄治郎氏によって試みられた

し「日本経済思想史研究の発達」大阪府立大学経済研究第十一号、昭和三十四年七月、又わたくしも過日極めて未熟ではあるが一応の考察を試みてみた。(拙論「日本経済思想の研究史」徳川時代経済思想を中心として)「慶應義塾創立百年記念慶應義塾大学経済学会編「日本における経済学の百年」上巻所収)これらは未だ完全とは申せないのではあるが、「日本経済思想史」研究の発展をほばたどる事が出来る。

維新以後、あらゆる分野において学問が急速に発達して行った中で、かなり久しい間、日本経済思想の研究が多くの人々の関心を引くに至らなかった。その理由は種々あったかと思うが、その主たる理由として、「明治前後に日本へ西洋の経済学が渡つて来て、次第に経済学の研究が盛んになつても、日本の経済思想とは全く異なつた学問系統に属し、西洋の経済思想史は問題とされても、日本の経済思想史は殆ど顧みられなかつた」ことが考えられる。これは幕末―維新时期以後移植された西欧経済学の内容が、徳川時代に発展をみたわが国の「経世論・経世済民論」的内容と全く相違し、両者はいわば異質的土壌の上に形成されたものと考えられ、しかも西欧経済学の移植の過程が徳川時代の「経世論」的内容と対抗的關係におかれつつ経過したことと重要な関係があった。そのため、一部の識者を除いては、徳川時代の「経済思想」に注意を払う人が少なく、研究が開始されるに至らなかったのはまことに当然といわねばならない。

「と述べている。個々の経済思想家が個別的に識者によって着目され、その生涯、思想が研究され、その歴史的評価が試みられ、あるいは経済思想家の著作が印刷にふせられると同時に、ややまとまった形での研究が世に問われはじめて来た。滝本誠一氏の「経済一家言」(大正九年)「日本経済学史」(大正十五年)、内田銀蔵氏「近世の日本」(大正八年)、あたらしく日本経済思想史研究に従事され、本多利明其他多くの研究を發表しはじめた本庄栄治郎氏の一連の研究、中村孝也氏の元禄享保期の経済思想の研究等が主要な研究であつて、この時期以降日本経済思想史研究に参加する学者の数も増加し、その研究領域も拡大され、思想史的研究の深化とあいまって、日本経済思想史研究の発達は急速に進められて行った。大正末年より昭和十年代にかけて、わが国経済史学界において、ほぼ三種の相異なつた傾向の史学理論が行なわれていたことについてはすでに高村象平・小松芳喬両氏共著「日本における経済史学の発達」(昭和二十四年)において詳細に論ぜられているところであるが、これを概括すれば、第一マルクス経済学Ⅱ唯物史観を肯定する立場、第二マルクス経済学Ⅰ唯物史観を否定する立場、この中には労働価値説及び唯物史観を理論的に批判せんとする立場と、国粹主義的、超国家主義的な「皇朝史学」的立場をとる見解とがある。第三マルクス経済学Ⅱ唯物史観に多少とも関心を示し、幾分か批判をふくみつつ、基本的にはマルクス経済学Ⅱ唯物史観を否定し、むしろ唯物史観と直接的な対決をなすことなく、専ら具体的な歴史

日本経済思想史研究を回顧して

詳細なる説明は前掲拙論にゆずらねばならないが、わが国の経済思想、とくに徳川時代以後の経済思想に注意がはられるようになったのは、ほぼ明治二十年以後のことであつた。明治三十年代に入るに及んで、西欧の歴史学や経済学により深くつちかわれ、その方面の知識をゆたかに蓄積し、わが国の歴史学及び経済学の発展に多くの貢献をなした河上肇、内田銀蔵、福田徳三、滝本誠一の諸氏、及び其他二、三の学者により、本格的に日本経済思想の存在が注意された。徳川時代において極めて優秀なる経済学説乃至経済思想が存在し、多くの経済思想家が活躍していた事実が注目された。彼等は残存する文献、諸資料を發掘し、思想家の生涯を明白にし、その経済思想を西欧の歴史学や経済学の光の下で、研究を進めて行つたのである。この時期において注目すべき研究として、河上肇氏「徳川時代の経済学説を論ず」(『国家学会雑誌』明治三十六年一月)と滝本誠一氏「日本経済学説の要領」(明治四十一年十一月)をあげられる。この時期以後、より多くの研究者の関心が此の方面の研究に向けられて行つたが、大正期は、日本経済思想の研究発達の土台がすえられるに至つた時期である。それは滝本誠一氏の編纂になる「日本経済叢書」(大正三年六月―六年十二月、後の「日本経済大典」)の刊行である。本叢書が日本経済思想の研究史上に持つ意義は極めて重要であつて、野村先生は自己の経済思想研究のあとを回顧されて「この仕事を比較的容易に果たし得たのは、故滝本誠一博士の「日本経済叢書」(後の「日本経済大典」)のおかげであ

事象を実証的に解明せんとする意図の下に、社会経済史研究の分野で多大の成果をあげつゝあつた立場、以上三個の相異なつた傾向を一応指摘することが出来る。この区分は勿論便宜的なものではあるが、大正末年より急速に発展して来たマルクス経済学Ⅱ唯物史観に対する態度如何によつて、当時の学界の動向を概括することが出来る。これら三者の立場から、日本経済思想研究がなされ、それぞれ相異なつた成果を生み出したことは勿論であるが、同時に、これら三者の立場から日本経済思想の研究が行なわれ、多くの研究発表が世に問われたのである。第一のマルクス経済学Ⅱ唯物史観に立脚する人々による日本経済思想の研究は、新しい分析視角に立ち、経済思想の持つ階級的性格を明白にせんとする意図、問題提起の鋭さ、解明への努力がなされて、注目すべき成果が出されつゝも、此の時期においてはややもすれば唯物史観の概念的な公式主義的援用におかされて、その十分なる研究が進展しないうちに、当局の弾圧により、完全に研究の自由と、發表の機関とを喪失し、事実上活動が中止せられて行つた。第二の立場の中所謂「皇朝史観」の立場に立つ人々は、わが国の諸思想を研究することによつてわが国の個性闡明と国策遂行に資せんとする目的をもち、わが国の諸思想に関心をもちつに至つた。その当初においては史料の検討、蒐集出版に努力するなど良き意向がみられたが、時代の推移と共にその科学的性格は政治的意図のもとに蹂躪せられ、科学の良心は麻痺させられて行つた。これら二つの立場よりする日本経済思想の研究に対して、第三

の立場に立つ人々による研究の進展は、この時期の研究水準を示すものとしていじめるしいものがあつた。この立場はマルクス経済学Ⅱ唯物史観を基本的には肯定せず、階級史観やイデオロギー論にある種の批判を持っていたところから、唯物史観に立つ人々からは、その史観の不徹底さや、ブルジョア的性格を痛烈に批判されつ

つも、歴史事実の実証的研究に従事せんとした研究者の学問に対する情熱と、綿密なる研究調査、厳正なる資料批判は、多くの貴重な学術的成果を生み出しつつあつたことは何人も否定出来ないことであり、立場を異にし、方法を異にする人々においても、何等かの意味でこれら第三の立場に立つ人々の研究成果を無視することの出来ぬものがあつた。申すまでもなく、第三の立場に立つ人々にあつても、理論的根拠である歴史理論は必ずしも同一のものではなかつたが、新旧ドイツ歴史学派の理論の影響がそこにあつたことは無視出来ず、人類の歴史においてとくに社会経済史的側面への関心をいぢるしく高めたものである。かかる立場に立つ人々の中より、日本経済思想の研究に従事する学者を生み出し、残存の著作・資料の蒐集・出版、思想家の生涯・思想の詳細なる研究、歴史的地位の評価等すぐれた実証的検討を通じて、多くの成果が世に問われたのである。戦後におけるわが国経済思想研究の基礎的な作業は、ほぼこの時期の、第三の立場に立つ人々によって、為しとげられたと申しても過言ではない。今日において日本経済思想の研究に従事せんとする我々はこの時期の研究の成果に多くおうているのであつて、何

等かの意味においてこの成果を足場として研究が進められねばならないものがあると考え。

この時期における第三の立場に立ち、日本経済思想の研究者として多くの成果を出した学者として、西には京都大学の木庄栄治郎氏、東には野村先生をあげる事に何人も異議はないであろうと考える。この分野における野村先生の主たる仕事は「徳川時代の社会経済思想概論」（昭和九年）、「概観日本経済思想史」（昭和十四年）、及び「徳川時代の経済思想」（昭和十四年）の三冊に集大成されている。

二

野村先生の学術的活動は、本誌に掲載されている年表及び著作目録によつて、ほぼ判明するのであるが、先生が「日本経済思想」の研究にとくに関心を示し始めたのは、昭和四年先生が慶應義塾大学経済学部「日本経済思想史」の講義を担当されるに至つた前後かと思われる。先生は本誌の他の諸稿によつて知られるごとく、すでにドイツ哲学によりつちかわれ、英国資本主義の研究及び日本経済史の研究に従事され、日本経済史研究のために資料の蒐集に努力を払いつつあつたと共に、日本経済思想に関する資料・文献の蒐集・研究を開始されていた。先生は「経済思想史の資料は経済史の資料としては第二次的なものではあるが、又われわれの祖先の精神生活の一端を知り、又それが後の経済的事実に与へた影響を知る上に頗る

重要なものである」との方針より、日本経済史の研究を促進する目的で経済思想にも多くの注意が払われるに至つたことである。当時慶應義塾大学経済学部には、「日本経済叢書」の編集者であり、「日本経済学説の要領」「経済」家言」「日本経済学史」「日本経済史」等の著者であつた滝本誠一氏が居られた。先生は昭和四年三田で「日本経済思想史」を担当されてより、本年御逝去されるまで約三十年間余、日本経済思想史の研究と講義に従事され、この分野の研究は日本経済史の研究と共に、先生の研究の太い二本の柱であつたと思われる。

わが国の思想について執筆された先生の最初の論文は、昭和五年九月から同六年二月にかけて、「成人」誌上に発表された「我が国民思想変遷の概要」（成人）五ノ九、十一、六ノ一、二）であつて、この一論文は直接経済思想の研究にあつたものではないが、つづいて発表された「上代における犯罪の観念」（昭和六年四月、「犯罪学雑誌」第四巻第四号）と共に、近世社会以前におけるわが国の思想は、経済思想や社会思想として人々に意識的に問題とされること少なく、より神秘的な、又より軍事的な方面に関心が寄せられていた事情を検討され、社会・経済思想が意識にのぼつて来る以前の国民思想の変遷を論じたものであつた。それ故日本の経済思想史を徳川時代より始めても、甚だしく不穏当でないと考えられた先生は、この同じ時期に、徳川時代の「主なる経済学者四十一名」を選出し、その経済論中主要であると思われる部分を整理・編纂されて「日

日本経済思想史研究を回顧して

本経済学説史資料、徳川時代」（第一分冊昭和六年五月、第二分冊昭和六年十月、第三分冊昭和七年十一月、合本は昭和十年三月）を出版され、大学における日本経済思想史の講義資料として利用されたのであるが、此の編纂は今日の研究者よりみれば、先生が徳川時代の思想家の中如何なる思想家に注目し、その思想家の如何なる思想に関心を寄せているかを知る事が出来、甚だ貴重な一つの資料であるといえよう。先生は、この時期における日本経済思想の研究を回顧されて次のごとく述べている。「私はこの仕事の第一期計画として、徳川時代の経済論を全体として把握すること、徳川時代の経済論中最も主要なる者と考へられる学者十名について、個々にその経済論を検討することとの二つを目的として研究を続けて来た」と。先生は右の二方面の研究を、相互に関連づけながら並行的に進められていたのであつて、このことは、先生が一般に経済思想を研究せんとする場合に、注意すべき方法として懐いていられた経済思想研究の方法に従つての研究といえよう。すなわち、「思想史を研究するのに二つの方法がある。一つは中心となる思想の種類に依つて検討する方法である。例へば自由主義経済論とか、又は貿易均衡論とかいふが如きものを一つ一つ検討して行く方法である。他の一つは思想家一人一人について列伝体的に研究して行く方法である。これ何れも一長一短である」と二つの方法を取ること主張されてゐることに照応している。

さて、第一の研究方法をとつた方向は、前掲二個の論文に加え

て、「徳川初期経済論の社会的意義」(昭和六年六月「思想」一〇八号)、「正徳・享保時代の社会経済論概説」(昭和六年九月「三田学会雑誌」第二五巻第九号)、及び「徳川時代社会経済論の本質」(昭和八年「社会経済史学」第三巻第八号)の三個の論文となって発展した。以上五個の論文を中心として、比較的概説的な徳川時代経済思想の研究書たる「徳川時代の社会経済思想概説」(昭和九年)が発刊されるに至った。本書は以後における先生の日本経済思想史研究の原型ともいわれるべきものである。本書は「思想史を取扱ふ方法論上の問題については、各人それぞれ異論があることと思ふ。唯私としては、ある思想を生んだ社会経済状態を離れて、その思想だけを取扱つてゆく方法、又相当年月に亙る時間の経過を無視して、始めも終りも一様に取扱ふ、言語又は思想の歴史性を無視せる方法、さらに又片言雙語からその論者の思想に近代の解釈を加へる方法等には賛成しかねる者である」との方法的反省の下に、第一章序論第一節我が国民思想の発展、第二節徳川時代社会経済思想の本質を論じ、以下徳川時代を幕府草創期、幕府成熟期、幕府頹廢期、及び幕府衰亡期の四期に区分し、それぞれの期において社会経済的背景、主要なる社会経済思想を概括したものである。本書が出版される時、多くの識者により注目され、その成果が高く評価された。例えば、当時の研究者の仕事が「量においては頗る厩大なものもあつたが、要するに徳川時代の各学者の思想、又はある事項に関する多数学者の思想、又は時代を限つての研究であつて、徳川時代を

一貫して経済思想の大きな流れを概観したものではなかつた。然るに野村博士の「徳川時代の社会経済思想概論」出づるに及んで始めてこの欠点が除去され……(昭和十四年十二月「経済史研究」二二ノ五、本庄栄治郎氏の新书推荐)と本書の出現をよるこばれた批評が出た。しかしながら、本書の成立が極めて概括的な思想史の叙述を目的としていたという事情よりして、「本書を通覧するに、各思想家の経済論の解釈には、従来の研究と異るところは殆ど見られない」(昭和九年十二月「経済史研究」第十二巻第六号所収の堀江保蔵氏の新书推荐)という評価をうけもしたのである。第二の研究方法をとつた方向は、概説的な、問題史的な研究と同時に並行して行つたのであるが、これは個々の経済思想家の個別研究としてみわたつた。先生は研究の第一期計画として、徳川時代経済思想家の中より最も重要と思われる経済学者を十名(熊沢了介、山鹿素行、具原益軒、新井白石、荻生徂徠、太宰春臺、本居宣長、三浦梅園、本多利明、佐藤信淵)選出され、この中三浦梅園は除かれて、平田篤胤が加えられたが、それぞれについて研究がつづけられ、研究成果が世に問われたが、いまそれを整理してみると次のこときものがあ

- 熊沢了介(蕃山) 「熊沢蕃山の経済論」昭和七年十一月「社会経済史学」二ノ八。「熊沢蕃山集」解題昭和十年十月。
- 中江藤樹 「中江藤樹の経済論」昭和六年、「成人」六ノ七。
- 山鹿素行 「山鹿素行の価格論」昭和六年二月「法律春秋」六

- 二五ノ四。
- 具原益軒 「具原益軒の社会経済思想」昭和九年六月「三田学会雑誌」二八ノ六。
- 新井白石 「新井白石の経済論」昭和八年八月「三田学会雑誌」二七ノ八。
- 荻生徂徠 「荻生徂徠の経済論」昭和七年八月「三田学会雑誌」二六ノ八。「荻生徂徠」昭和九年十一月「人と学説叢書」中の一冊。
- 太宰春臺 「太宰春臺の経済論」昭和七年二月「三田学会雑誌」二六ノ二。
- 乳井貢 「乳井貢の経済思想」昭和十三年二月、三月「三田評論」四八六、四八七。
- 本居宣長 「本居宣長の社会思想史上に於ける地位」昭和六年十月「法律春秋」六ノ一〇。「本居宣長の社会経済思想」国学運動の勃興「昭和十一年八月「三田学会雑誌」三〇ノ八。
- 本多利明 「本多利明の経済開闢論」昭和十四年三月「三田学会雑誌」三三ノ三。
- 平田篤胤 「国学の社会思想史的意義」昭和十二年一月「三田学会雑誌」三二ノ一。
- 佐藤信淵 「幕末における代表的経済論者佐藤信淵」昭和十二年八月「三田学会雑誌」三二ノ八。

日本経済思想史研究を回顧して

(但し、〇印を附した人物は十名の中に加えられていないが、藤樹は了介の、貢は春臺の章に附録として収録されている。)

以上経済思想家の個別研究は其後若干訂正補筆されて「徳川時代の経済思想」(昭和十四年十一月発行)第二部各論の中に収録されて出版された。本書は第一部総論としてすでに発表されていた「徳川時代に於ける商業論の変遷」(昭和七年十月「三田学会雑誌」二六ノ一〇)、「江戸時代に於ける経済思想」(昭和十一年三月「歴史教育」一一ノ三)、「徳川時代の農業論」(昭和十三年二月「三田学会雑誌」三二ノ二)の諸論文を中心に、第一の研究方法に立脚した概説的な論述である。「経済論の本質」「農業論」「商業論」「経済論の転化」の諸章が収録されている。本書に対する出版時の批評の一つとして「日本経済思想、或は広く言へば日本思想検討究明の必要が切実な今日、本書の如き著述が広く精読さるべきは何人にも異なるのではないことと信ずる。」(昭和十五年一月「経済史研究」第二十三巻第一号黒羽兵次郎氏の新书推荐)がある。

「徳川時代の社会経済思想概説」(昭和九年)の発刊以後、慶應出版社の「経済学講座」の一部として「日本経済思想史」(昭和十三年)が明治以降の経済思想の概説を加え、時代別に各々の時代の社会経済的事情と社会経済論の特色を概説したものとして発行され、この両者が合体され、訂正補筆されて、先生の主著とも目される「概説日本経済思想史」(昭和十四年六月)が完成されたのである。本書は昭和四年前後より開始された先生の日本経済思想の十年間に

わたる研究を集成されたもので、日本思想史研究が必ずしも多くなかった当時にとっては注目すべきもの一つであった。本庄栄治郎氏は本書の出現に対して次のとき紹介をなしている。「本書に説かれてある所が何れも豊富な資料と透徹せる観察力により、而も事実と思想との相関々係を見て解釈され、又個々の学者の説を紹介したものでなく、それを通じてその時代の思想の一般傾向を観察したものであり、封建社会維持の思想と反封建的思想の頭はれ等についても随所に論ぜられてゐるから、通説して興味深きものがあり、経済思想史又は経済史のみならず、すべて徳川時代を理解する上に極めて意義ある著述であることはいふ迄もない。」(昭和十四年十一月「経済史研究」二二ノ五、本庄栄治郎氏の新著紹介)。先生の仕事はその立場を異にするマルクス経済学Ⅱ唯物史観に立つ人々からは高く評価されなかつたごとくであるが、しかしながら、それらの人々は必ずしも先生の意図するところを正しく理解していたとは思われないものがあつたようである。当時日本経済思想の研究は本庄栄治郎氏の仕事をはじめとして、土居喬雄氏「日本の経済学者」(昭和十六年)の仕事など、一面個別的な経済思想の研究に一つの重点がおかれ行なわれていた時代にあつて、一貫して徳川時代の思想の流れを把握せんとした本書の把握には、そこに論ぜられている諸問題が必ずしもすべてをつくしていたとは申せなくとも、今日においてすら貴重な示唆をふくんでいることは否定出来ないものである。

さて、昭和十五年以降における先生の経済思想に関する研究は、戦時体制への突入という非常事態の発生に多少とも影響されたことは否定出来ないところであるが、しかしながら先生の科学的態度は歪曲されることなく、科学の批判に耐えるような仕事がなされて行つたことは注目に値しよう。まず昭和十五年より文芸春秋現地報告に「日本経世家列伝」として、熊沢蕃山、上杉鷹山、荻戸太華、新井白石、二宮尊徳、大原幽学、田沼意次、松平定信、佐藤信淵、水野忠邦、田中丘隅、徳川光圀の十二名の経世家が論ぜられ、これが後に一書にまとめられ「江戸時代の経世家」(昭和十七年四月)として出版された。ここで「経世家」というのは「おのれ一個の利害を後にしてどうすれば世の中を住みよき安居楽業の地とすることが出来るかを考ふる者も亦、これ一個の経世家であり、時代の指導者である」との意味であり、安居楽業には経済的保障を必要とするところから「少数例外者の生活をよくすることではない。多数の民衆の生活を、すべての人間の生活をどうしたら改善出来るかを問題とする」(注九)のであつて、幕政を中心に、あるいは藩政に活躍した人々、地方民政に従事した人々、民間における改革者として前述の十二名を選択して論じたものであるが、学術研究論文というよりも啓蒙的な書物であるといえよう。さらに、時局の要請をうけ、国防論、南方経略論、商業論や経済倫理、貿易論、心学や職業倫理等に関する幾つかの論文が出されている。

戦後における先生の日本経済思想に関する研究論文は必ずしも多

くない。過去の仕事を整理され講義案として書かれた慶應義塾大学通信教育課程の「日本経済思想史」(昭和二十五年)、福沢諭吉先生に関する研究、「三浦梅園の経済論」(昭和二十三年七月「三田学会雑誌」四一ノ七)、「日記を通じて見た新井白石の家計」(昭和二十七年四月「社会経済史学」一八ノ一)其他であり、思想史研究のための方法としては総括的に「思想史研究の諸問題」(昭和二十七年五月「三田学会雑誌」四五ノ五)が論ぜられた。これは先生の思想史研究の方法を理解する上に重要な論文である。最後に、開国百年記念文化事業会編になる「明治文化史」(「学術編」(昭和二十九年十二月)の中に、「人文科学篇」を執筆された。本論文は明治以降における人文科学の発達を概説したものと注目すべきものである。

以上、先生の日本経済思想史研究の跡を、先生が発表された著作、論文を中心として、いわば外面的に、概括を試みてみたのであるが、経済思想史研究の分野における先生の仕事は一方多くの経済思想家の思想を研究すると共に、他方総括的な経済思想の展開を把握せんとする研究として実を結び、多大の影響を学界に与えたものといえるのであつて、その真価は将来ますます発揮されるであらうと思われる。

三

野村先生が日本経済思想研究において論じられた問題は多種多様

日本経済思想史研究を回顧して

であつて、いまそのすべてについて考察することは不可能であると考えるので、ここでは第一に思想史研究そのものについての方法論的問題についての考察と、第二に固有思想と外来思想との交流、すなわち外来文化摂取の問題に限って若干論じてみたいと思う。ここであらかじめ注意しておきたいことは、先生と全くその思想上の立場を異にする地点に立って、高踏的に批判を加え、先生の問題提起、その解決の仕方の不徹底さを指摘することは、ある意味においては意味のあることとは思われるが、わたくし自身はこれをとらな

いとということである。

さて、思想史研究の方法と思想史研究の目的、さらに思想史研究に従事する学者の態度等についての先生の見解をまず概説しよう。

此の問題について、先生はすでに前掲三冊の著書の外、多くの論文でふれていられるのであるが、直接本問題を対象として論述したものととして「思想史研究の諸問題」(昭和二十七年五月「三田学会雑誌」四五ノ五)が重要な論文である。それによれば、思想史の対象なるものは単なる個々の学説ではなく、一つの集団又は一定の時期についての同一の思想、全体的思想である。それは個の思想の中に表現されている。それ故全体的思想を明白にするためには、個の思想の吟味が必要である。個の思想はその歴史的な生活構造により異なる。かくて思想史の研究においては、個の思想の検討が基礎的作業であり、重要であるが、それは極めて困難な作業である。個の思想は個の有する性格により規定づけられ、個の有する性格は時間的

ならびに空間的・遺傳・環境に制約されて形成され、複雑なる諸条件の結合である。個の性格を決定する諸条件を出来る限り明白にすることが必要であるが、「個の思想を概括的社会情勢を以て規定づけることは危険である」と注意を払う。しかしこの作業は不可能に近いものであり、とくに個の思想が著作を通じて究明される場合にあつては、その著作の年代、原本批判、著作当時の著者の立場、著作の理由、著者の使用した言語の正しい理解等、あらゆる努力を払って、著者の表現を出来る限り、著者の意図する如く理解することが大切である。しかしそれは容易な業ではない。思想家の書物を自己流に読解し、あるいは現代流に解釈することはさしつかえないが「思想史研究者としてその原典を検討する場合には出来るだけ厳密に本来の意味を探索しなければならない。古典から現代的意味を汲みとることは思想史研究者の任務ではない。思想史研究者はどこまでも客観的にその意味を知らなければならず、そのためにはその時代の用語、又その思想家の用語にも通暁しなければならぬのである」と。このように個の思想の研究には細部の困難な作業がともなうのであるが、「かうした心構へを以つてその全力を尽し、不注意から生ずる誤謬をなくし、客観的に把握することが、思想史研究者の採るべき態度であるといへるであらう。」かくて、個の思想を客観的に検討するためには、原典批判をはじめとし、資料批判を、思想家の日記、書簡、断片的なメモに至るまで多くの資料を蒐集整理し、資料の価値判断を行なうことによつて、はじめて思

想史は「正しい素材」の上に立脚出来ると結び、従つて思想史研究においては、「一方各個の思想を検討し、それが如何なる現実に対する批判として生じたか、又それが思想自体として如何に展開し、それが現実に対する反映を明かにすると共に、他方においてその社会の全体としての思想の動向を検討し、その思想に依つてその社会の現実が如何に進展させられたかを明かにすることを任務とする」と。さて、思想史を研究する上に、個の思想家を知るために、原典・諸資料を蒐集し、厳密に検討を加えることによつて、それらを「正しい素材」として思想史研究が出発するという指摘については、何人も否定する者はないであろう。そのためには多くの、苦しい困難な作業をなす事をいとうてはならないであろうと思われ、このことは如何なる学問の分野においても、必要であることはいまさら述べる必要はないであろう。先生は面前に見る学界の事情はかかる基礎的操作を無視し、何らの科学的反省も加えることなしに、結論を出すに急であつたことに対して、激しいいきどおりをいだいていられたのである。しかしながら、右のごとき科学的な、厳密なる学的作業そのものが直ちに「思想史」の内容であるという様に考えてよいものであろうか。思想史研究者の任務を「古典から現代的意味を汲みとることは思想史研究者の任務ではない。思想史研究者はどこまでも客観的にその意味を知らなければならない」と限定する時に「現代的意味を汲みとること」「客観的にその意味を知る」ということの内容如何によるとは申せ、思想史研究に従事する者にとつて、此

の地点に立ち、今一度これらの内容に反省を加えることの必要を痛感し、これを乗り越える必要がありはまいかと、そこより思想史研究の課題があたりらしく反省させられねばならぬのではないかと愚考するのである。

第二の問題として一国の固有思想と外来思想との交流、外来文化の摂取の問題に考察の目を移してみようと思う。一国の文化・思想は全く異なった文化・思想を外部から導入しつゝ一層複雑なる発展をとげるものである。わが国の文化・思想の発展の跡をたどつてみると、仏教・儒教の導入、それと共に当時の先進国の文化・思想を移入、消化を通じていちじるしい発展をなしたことや、中世末・戦国期に所謂南蛮文化と接触し、あるいは徳川中期以降の蘭学との交流のごとき、あるいは幕末・明治維新以後における西欧文化の移植のごとき、外来文化の影響を多くうけて来たのである。それ故、外来文化がわが国の文化に如何なる影響をなしたが、外来文化の摂取についての考察を試みることは、わが国文化・思想の発展とその特質を把握する上に極めて重要であるといわざるをえない。今日まで我が国と外国文化・思想との交流、外国文化の摂取に関する研究が数多く、例えば家永三郎氏「外来文化摂取史論」(昭和二十四年)、講座近代思想史Ⅷ「日本における西洋近代思想の受容」(昭和三十四年)等、発表されて来たのも故なしとしないのである。野村先生も日本経済思想史研究に従事された当初より、わが国文化・思想と外国文化・思想との交流の持つ文化史的意義を重視し、それについ

日本経済思想史研究を回顧して

て検討を加えられたのであつて、前掲「思想史研究の諸問題」の論文中にもこの問題にふれるところがあつた。いま先生の理論の概要を述べ此の問題を考察してみよう。一国の固有思想は外来思想の刺激によつて極めて顕著なる影響をうけるが、此の場合両国間の文化発展の度合の相違によつて、外来思想の持つ影響はいちじるしく異なる。外国思想を移入する一国の文化があまりにも低い場合には、外来思想により圧倒されてしまう事もありうる。それ故、外来思想が受容されるためには、第一にその思想を受容しうるだけの「理解力」を後進民族が持っていること、換言すれば、後進国における固有思想自体の中に、外来思想を受容しうる思想的準備がなされていることが必要であり、この場合にのみ外来思想を受容しうる可能性がある。もし後進民族が外来思想を「優秀」であると考える場合には、それを全面的に摂取せんとする意欲の下に「思想的模倣」が行する。これに対して固有思想の反抗と、外来思想の現実生活との間に矛盾が発生して来る。もしすでに固有思想内部における発展傾向が外来思想のそれと同一である場合には、外来思想の指導的影響はすこぶる有効であり、やがて外来思想は民族固有の思想により補正され、変容をうけ、そして民族固有の思想へと同化して行く。しかし外来思想が摂取される時、その摂取の仕方が問題となるであろう。言葉により外来思想が導入されたにもかかわらず、思想そのものがどの程度影響を与えたかを判断することが極めて困難な場合がある。外来思想が入つて来ても固有の思想がそのまま容易に同化

せず、思想の保守性をあらわす場合もあるであろう。それ故外来思想を如何なる形態で摂取したかを十分注意して検討することが必要である。この場合、交流する両国間の文化程度の差違、民族性の問題、外来文化の受入の形式、時期等にも関心を寄せねばならない。このように文化の交流、外来思想の摂取に関して一般的な考察を試みられた先生は、直接的には、とくに幕末―明治維新期以降におけるわが国の西歐文化摂取の問題に重大なる関心を寄せられたのである。先生の初期の論文中にも此の点を論じた部分がある。とくに前掲「徳川時代の経済思想」中の第四章「経済論の転化」や戦後先生が相当の努力を払って書かれた前掲「明治文化史」中の学術編人文科学の発達等の所論の中に、具体的な見解を見ることが出来るのである。「明治以後、わが国は西洋思想を受容れ、自然科学的考察を何ら躊躇するところなく採用してゐる。その間の事情の解釈には単にわが国民の模倣性とのみいひ切れぬあるものが存するやうに思ふ。単に合理的な彼の思想を真似したといふのではなく、その合理的な点が一層日本人本来の性格に合致し、全般的にこれを受容したと考へられる。しかもその日本人の近世的合理観に依る物の見方は、徳川期を通じて、相当に強く発達してゐるし、又その時代の思想的訓練が新時代の新思想を受容するに足る素質をつくりあげてゐたと思はれる。」^(注一五)と。かくて、先生は徳川時代における思想の発展の中に、明治以降西洋思想を受容しうる思想的準備が着々となされつつあったこと、その場合、先生は西洋の近世思想のもつ科学的合

理思想、現世的な発展思想、経済的合理主義、その土台としての資本主義制度の確立、民族的自覚に基く近代国家の建設への日本の移行を準備したものと見て、徳川時代における合理思想発展の跡を探り、それをとくに儒教思想の中にある合理観の展開に、あるいは洋学の発展の中に、あるいは国学の展開の中に着眼された。勿論儒教的合理観がそのまま西洋的な科学的合理主義と直結しないことは云うまでもないが、少なくとも前者の発展の上に後者の受容を考え、それ故その受容の仕方の特徴をもこの線の上にたしかめようとしたのである。この点について、徳川時代の「経世論」と明治以降の「経済学」の移行との関係を述べた先生の見解には注目すべきものがあると思はれる。「経済論から経済学へ」(昭和三十二年五月「日本哲学思想全書月報」第一八号)の小論の中で、先生は次のように論ぜられてゐる。「江戸時代の経済論と明治時代の経済学とを卒然と比較する時、その間に何らの連絡がないように思われるかも知れない。……しかし、如何なる思想にせよ、全く異なつたものが、何らの素地のないところで容易に受け容れられ、育成されるわけはない。……明治維新以後、日本において急速に西洋思想を取り容れることができたのは、少なくともこれを受容し得るだけの素地が日本人の間に形成されていたからであると考へられよう。……私はある民族の思想史は假令外的刺戟によって大きな変革を起した場合でも、個人的な例外はあるとしても、全体としては常に連続性をもつものと考えてゐる。この立場から江戸時代の経済論と明治以降の経

済学を採り上げてみると矢張り表面に現われているほど間隙は甚だしいものではなかつたと思う。……私は江戸時代の経済書を年代順に読んで、その発展には確かに明治以降の――西洋経済学移植後の経済学に連りがあるように思う。殊に後二期、三浦梅園―本多利明―海保青陵―佐藤信淵―福沢諭吉―神田孝平―加藤弘―佐田介石―大島貞益等々と辿つて来ると、それほど驚くべき飛躍をなしてゐると思はれないのである。……それらの人々の議論には一方字句通りの西洋経済学の翻訳が認められるとともに、他方千年以上の伝統を有する儒教的倫理思想が濃厚に残存してゐる。^(注一六)と。右のごとく、明治以降の経済学の発展を考える時に、先生の理論に従えば、それに従事した人々の思想の中に、いちじるしく儒教的倫理思想と教養とが存在していたこと、それ故西洋思想を受容した時、全く異なつた伝統の下に立つ西洋思想の真意をどれほど把握したか、「千年以上の伝統をもつ儒教的精神をそう簡単に離脱することはできなかつたのではなからうか。西歐思想を案外自分なりに理解してゐた者が多かつたのではなからうか」という見解が、徳川期の経済論と明治期の経済学とを結ぶ一つの線としてとられており、さらにこの理解は固有思想と外来思想との交流を考える場合、広くは外来文化摂取の場合を検討する考え方として、先生の理論を形成してゐたものごとくである。先生は徳川期の経世論より明治期の経済学への移行の問題をさらに徹底して究明せんとする意図を働いていられたごとく、前掲論文が発表された以後、生前度々わたくしに

日本経済思想史研究を回顧して

もこの点に関する意図を物語っておられたのであつたが、これら諸点についての、より詳細な検討と執筆の完了をまたずして、先生は御逝去されたのである。 (昭和三十五年八月二十日)

- (注一) (注二) 野村兼太郎先生、通信教育「日本経済思想史」(昭和二十五年) 六頁。
- (注三) (注四) (注五) 同「徳川時代の経済思想」(昭和十四年) 序二頁。
- (注六) 同「日本経済思想史」一四頁。
- (注七) 同「徳川時代の社会経済思想概論」(昭和九年) 序二頁。
- (注八) 同「江戸時代の経世学」(昭和十七年) 四頁。
- (注九) 同 九頁。
- (注一〇) 同「三田学会雑誌」四五ノ五 一五頁。
- (注一一) (注一二) 同一六頁。
- (注一三) 同一七頁。
- (注一四) 同一八頁。
- (注一五) 同「徳川時代の経済思想」一〇六頁。
- (注一六) 同「経済論から経済学へ」(「日本哲学思想全書月報」第一八号) 一一三頁。
- (注一七) 同一頁。